

J. P. Süßmilch (1707-67) についての覚書*

松 川 七 郎

I

19世紀の中葉以降、Süßmilchは統計学者・人口論者(デモグラファー)・国民経済学者・社会生物学者・社会学者・社会学者・社会衛生学者などとして、さまざまな方面から評価されてきている。そしてこのばあい、かれの著作としては、数多くのもののなかでも『神の秩序』¹⁾と略称される主著がつねに評価の対象になっているのであって、この事実は、かれのこの主著がすくなくとも上記のように多面的な内容をもっていることと表裏するものと言えよう。

ところで、このようにさまざまな評価のなかでかれがもっとも高く評価されているのは統計学者としてであり、とりわけ人口統計学者としてである。そして、かれがその他の学問分野からうけてきたもろもろの評価は、かれが人口現象を多面的に論じたその諸側面に着眼してのものなのであって、この多面性という観点から『神の秩序』を読みかえしてみると、かれは、1855年にフランスのA. Guillard(1799-1876)がはじめてデモグラフィを基礎づけたその本来的な意味、つまり「デーモスの状態についての記述」という意味においての先駆的なデモグラファーの1人と言えるかも知れない。ところが、統計学者ないしは人口統計学者としてのSüßmilchに対する高い評価には、もっぱら『神の秩序』にあらわれているか

れの数学的(確率論的)研究方法や、その後統計学上いわゆる「大数法則」と名づけられるようになった「法則」についてのかれの洞察などに着眼し、事実上、この著作の全文脈からこれらの点だけを取り出すことによっておこなわれているばあいがすくなくないのである。

統計学に対する規定は統計学者の数ほど多いようである。筆者はみずから統計学者をもって任じているわけではない。しかし、資本主義社会における諸現象の数量化や、それにもとづく数量的諸関連の研究には、社会科学的全体認識の理論にもとづく分析が当然先行すべきだと考えている。したがって、たとえ統計学をどのように規定するにせよ、すくなくともそれが資本主義社会を研究対象とするものであるかぎり、確率論という数学理論をその主たる研究方法とすること、つまり統計学を普遍科学的方法論とすることには賛成できない。けれども、Süßmilchが数学的(確率論的)方法をその研究方法の1つにしていたことはまぎれもない事実である。そこで、『神の秩序』を全体として考え、それにあらわれているかれの思想や方法の構造の特徴を考えてみることにしよう。

1) *Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, Tod, und Fortpflanzung desselben erwiesen von Johann Peter Süßmilch, Prediger beym hochlöblichen Kalcksteinischen Regiment. Nebst einer Vorrede Herrn Christian Wolffens.* Berlin, 1741. これが初版のくしわいタイトルである。初版は1巻本で本論は9章からなり、それに付録表が18ついている。この初版本は高野・森戸両博士の手で邦訳されたが(統計学古典選集第13巻, 1949年), 原著がひじょうな稀観書であるため、昨年の3月に、法政大学大原社会問題研究所によって、原著者の没後200年を記念して複製された。原著の第2版は1761-62年に2巻本として出版されたが、それは初版の出版後20年間の著者の研究成果をとりいれた“ganz umgearbeitete Ausgabe”で、本論は25章からなり、付録表が68ついている。その後、本書は第3版(1765年), 第4版(1775-76年)と版をかさねた。そしてこの第4版は、原著者の没後、その女婿C. J. Baumannが注釈や補遺を1巻にまとめてつけ加えたために3巻本になった。この第4版がもっとも広く流布されているもので、いわゆるパウマン版がそれである。以下、この小稿の注のなかでは本書をG. O. と略記することにする。

* 1967年10月に開かれた日本統計学会の総会で、筆者は他の4人の研究者たちとともに、Süßmilchの没後200年を記念して、Süßmilchについての共通テーマ報告をした。そしてそのばあいのテーマは「J. P. Süßmilch(1707-67)の『神の秩序』(初版)に関する研究」であって、その共通のねらいは、『神の秩序』を再検討し、Süßmilchの再評価に接近するための手がかりになる諸問題をだし合う、ということであった。この小稿は、上記の共通テーマ報告に参加した1人としての筆者の分担部分を、その後の筆者の若干の研究結果をもとりいれて部分的に布延し、全体として再整理したものである。なお、上記の共通テーマ報告に参加した他の4人の研究者の報告題目や、またそのさいに用いたSüßmilchの伝記資料・著作目録その他の参考文献のリストは、雑誌『統計学』第18号(1968年3月号)に「資料」として収められている。これをも合せて参照ねがえれば幸いである。

う。

II

Süßmilch が『神の秩序』として結実した人口動態の研究に関心をもつようになった直接の動機は、イギリスの理神論者 W. Derham (1657-1735) の著作『自然神学』(Physico-Theology. 1st ed., London, 1713) を読んでそれに感動したことにある²⁾。このばあい、かれはこの著作の第4編第10章で Derham が人口動態におけるもろもろの数量的規則性を「神の英知」や「神の摂理」として説明しているくだりにもっとも強く感動したのであろう³⁾。つまり、その家系的伝統からみても熱烈なプロテスタントであった聖職者 Süßmilch は、旧約聖書の「創世の書」にある「生めよ、ふえよ、地をみたせ、地を従わせよ」という神の命令を至上と考え、現世における上述の規則性の存在を「神の秩序」として前提し⁴⁾、この「秩序」をプロイセンを中心としてできるかぎり広範な地域において科学的に実証するために研究に着手したのである。そしてこのような宗教的な動機は、いわゆる啓蒙的絶対主義の確立に邁進しつつあった18世紀プロイセンの富国強兵政策の1環としての人口増加策にまさしく一致するものであって、Süßmilch のばあい、信仰上の絶対者としての神と、現世における絶対者としての国王 Friedrich II. とは2にして1なるものであった。『神の秩序』の初版および第2版がともに熱烈な讃美の念をこめてこの国王に献呈されているのもけっして偶然ではない。

ところで、Süßmilch のこのような宗教的政治的であると同時にすぐれて自然科学的でもあった思想上の特徴は、かれの青年時代の教養に由来するものであり、また18世紀中葉のプロイセン的啓蒙の所産とも言えよう。すなわち、ベルリンの近郊の熱烈なプロテスタントで富裕な商人の子として生れた Süßmilch は、少年時代から自然・人文・社会の諸科学に興味をもったが、かれのこのような基礎的な教養を完成させたのは、当時のプロイセンにおける「ピエティズムと啓蒙主義の双方の牙城と

して青年学徒をひきつけていた⁵⁾ハレ大学と、「哲学においてより自由で、諸科学への数学的方法が新たに採用されつつあった⁶⁾イエーナ大学とであった。この両大学でかれは神学・哲学・言語学・法律学および自然諸科学を修得したが、ハレではピエティズムのもっとも偉大な指導者 A. H. Francke (1663-1727) に愛された、という⁷⁾。かれが Francke のピエティズムから大きな影響を受けたであろうことは想像にかたくないが、イエーナでは医学と数学との結合形態としての医療数学派(iatro-mathematische Schule)の創始者 G. E. Hamberger (1697-1755) から強い影響を受けた⁸⁾。そればかりではなく、かれはイエーナの大学で国状学としての“Statistik”の代表的な学者 M. Schmeitzel (1679-1747) の講義に出席し、その影響をもうけたであろう⁹⁾、と言われているのである。

このように見てくると、Süßmilch の基礎的な教養は、Derham の理神論や Graunt-Petty を創始者とする政治算術の数理的な側面をきわめて自然に受容すべき思想的素地をもっていたと言わなければならない。これを要約すれば、プロテスタント神学におけるピエティズムと、哲学における合理主義と¹⁰⁾、自然諸科学(とくに医学および数学)にもとづく実証主義的目的論とがこの思想的素地の主たる要素であった、と考えてさしつかえな

6) J. C. Förster, *Nachricht von dem Leben und Verdiensten des Herrn Oberconsistorialraths Johann Peter Süßmilch*, Berlin, 1768, S. 23-25.

7) Ebenda, S. 20. Süßmilch がハレで学んだのは1724-27年であり、イエーナで学んだのは1728-32年であって、かれが聖職についたのは1732年にベルリンに帰ってからである。

8) K. F. Reimer, “Johann Peter Süßmilch, seine Abstammung und Biographie.” *Archiv für Soziale Hygiene und Demographie*, Neue Folge, 7. Bd., 1932, S. 22-23.

9) G. Jahn, “Johann Peter Süßmilch und die Gesellschaftslehre des 18. Jahrhunderts,” *Reine und angewandte Soziologie. Eine Festgabe für Ferdinand Tönnies*, Leipzig, 1936, S. 22.

10) 『神の秩序』の初版に序文を書いている Ch. Wolff (1679-1754) は、Süßmilch がハレ大学で学んでいたころにはこの大学を追放されていたが、Wolff の先輩で合理主義的自然法を説いた Ch. Thomasius (1655-1728) は大きな影響力をもっていた。G. Jahn, a. a. O., S. 21. Süßmilch が Wolff のの哲学から影響を受けたことは後述するように歴然としている。しかし両者の個人的なつながり(なぜ『神の秩序』の初版に Wolff が序文を書くようになったかという経緯)は明らかではない。

2) G. O. 1. Ausg., Vorrede. 邦訳書 13 ページ。

3) *Physico-Theology*. 8th ed. London, 1727, pp. 174-83. Derham がここで挙示しているもろもろの規則性は J. Graunt や W. Petty などがイギリス経験論に立脚した実証的な方法で導出したものである。

4) G. O. 2. Ausg., 1. Theil, Einleitung.

5) G. Bondi, “Der Beitrag des hallischen Pietismus zur Entwicklung des ökonomischen Denkens in Deutschland.” *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1964, Teil II/III, S. 27.

かろう。そしてこれらの思想は、18世紀中葉のプロイセンにおける啓蒙主義を、たとえ全面的にはないにしても、特徴づけるものと考えてさしつかえないのである。

III

すでに述べたところからもうかがわれるであろうように、その宗教思想において絶対者(神=国王)に対する絶対的服従というピエティズムの信奉者であった Süßmilch は、その方法論においては、Wolff 流の目的論的見地にたっていた。このことは、現世の社会をもふくめた全世界は神の英知を証明するために創造されたということをも前提し、それを支配する「恒常的・普遍的で、偉大で完全無欠な、しかも美しい秩序」¹¹⁾、すなわち神の秩序を人口動態をつうじて証明しようというかれの研究動機によくあらわれている。Süßmilch は、この「秩序」を「共存または継起するさまざまな事物の類似性および同形性から生じる」¹²⁾ものとして説明し、またこの「秩序」を「法則」(Gesetz)とも言いかえているが¹³⁾、窮極的にはこの「秩序」を神に帰してしまうのである¹⁴⁾。

ところで、『神の秩序』の初版および第2版をつうじて Süßmilch がとりあつかっている問題は、Crum が適切に指摘しているように¹⁵⁾、人口増殖論と、婚姻および出産力論と、死亡率論との3つに大別しうる。そしてこれらの人口動態からかれが「神の秩序」をひきだすために用いている基本的方法は、数学こそが「認識の確実性」の保証だと考える Wolff が上記の序文で述べているように確率論(wahrscheinliche Theorien)であり¹⁶⁾、いっそう正確に言うならば確率論的思考方法である。というのは、Süßmilch 自身はこの著作で J. Bernoulli (1654-1705) や A. de Moivre (1667-1754) や W. J. van s'Gravesande (1688-1742) の業績に言及しながら、実際には、それが「たいへんな紙面をとり」また「ごく少数の読者にしか役だたぬから」という理由で、この「代数の計算を省略」しているからである¹⁷⁾。つまり、Horváth 教授が適切に指摘しているように¹⁸⁾、Süßmilch は18世紀初頭の確率論をいわば哲学的な思考方法として採用したにすぎないのであって、観察される数が大であればあるほどその観察からひきだされる結果の確実性は大きくなる、という考えかたは、この著作の初版および

第2版をつうじてじばじば表明されているのである。

ところが、Süßmilch の方法的特徴はこれだけではない。Lazarsfeld 教授のことばをかりれば、『神の秩序』を全体として見ると、それは「社会分析によってみだされている」¹⁹⁾言いかえれば、Süßmilch がけっきょくは「神の摂理」やその「秩序」に帰してしまう人口動態における規則性を論じるばあい、かれは人口現象をきわめて広い社会的視野においてとりあつかうのであって、その結果、かれのこの著作は人間生活のほとんどすべての面を論じることになっているのである。この事例をここでいちいちとりあげることはとうていできないが、たとえばかれが都市における高死亡率を論じるばあい、かれは「巨大な富はつねに多数の貧者とむすびついており、したがって「富は貧困の母であり、多数の貧乏人をつくりだす」²⁰⁾とやっている。またかれが疾病を論じるばあい、全体としてのかれの論旨は、疾病の医学的解明とならんで、その社会性にも力点がおかれている²¹⁾。さらに、かれは人口増殖との関連において農業および工業を論じているが、そこにはフィジオクラットを想起させる所論がみとめられるし²²⁾、人口増殖の障害としての奢侈を論じるばあい、そこには道徳論がその基調をなしている²³⁾。そして以上すべての所論の根底には絶対主義プロイセンの興隆を希求する国家観(政治思想)およびそれと表裏する形で吐露されている熱烈なプロテスタントの宗教思想がよこたわっているのである。

このように見てくると、Süßmilch の『神の秩序』にあらわれている思想的・方法論的特徴を、とりわけその構造をどのように統一的にとらえるのが妥当であるか、現在の筆者にはきわめて困難というほかはない。そこで、従来のもろもろの評価にかかわらせながら、この問題を

17) Ebenda, S. 178. 邦訳書 249-50 ページ。

18) R. Horváth, "L'ORDRE DIVIN' de Süßmilch. Bicentenaire du premier traité spécifique de démographie (1741-1761)." *Population*, (17^e année), 1962, n° 2, p. 276. Horváth 教授は Süßmilch が確率計算を実際におこなわなかったことをかれの「数学的知識の素朴さ」に帰し、また Bernoulli が提示した「諸観念を念頭においてさえもない」と言っているがこれらの点は問題であろう。

19) P. F. Lazarsfeld, "Notes on the history of quantification in sociology—trends, sources and problems." *ISIS*, Vol. 51, No. 168, June 1961, p. 282.

20) *G. O. 2. Ausg.*, 2. Theil, S. 111.

21) *G. O. 1. Ausg.*, Cap. VII., Ebenda, 2. Ausg., Cap. XXIV.

22) *G. O. 2. Ausg.*, Cap. XIV-XVI.

23) Ebenda, Cap. XVII.

11) *G. O. 2. Ausg.*, 1. Theil, S. 49.

12) Ebenda, S. 50.

13) Ebenda, S. 51.

14) Ebenda, S. 59-60.

15) F. S. Crum, *The statistical work of Süßmilch*, Boston, 1901, p. 7.

16) *G. O. 1. Ausg.*, Vorrede. 邦訳書 1-2 ページ。

もうすこしつめてみることにしよう。

IV

Süßmilch がハレ大学で学んだ当時のプロイセンでは、「もしおまえがハレに行くなら、おまえはピエティストか、それとも無神論者かのいずれかになって帰って来る」ということがおどし文句としてささやかれ、しかもそれは、むしろ誘惑的なひびきをもっていた、という²⁴⁾。ハレで学んだ Süßmilch は、無神論者とは正反対のピエティストになった²⁵⁾。Friedrich II. に対するかれの絶対的な忠誠はこれと表裏するものであるが、同時にかれはすぐれた自然科学者であり、鋭敏な社会観察者でもあったのである。

このような Süßmilch の『神の秩序』における確率論的方法のみに着眼し、政治算術を体系化した人として L. A. J. Quetelet (1796-1874) のまえに位置づけることは、かりに統計学的方法の本質が確率論にあるとしても、妥当ではなかろう²⁶⁾。というのは、Süßmilch における確率論的方法は神学的目的論的思想や方法と不可分のものであったからである。森戸博士はかれの「神学的目的論的表現に迷わされてはならぬ」と言っているが²⁷⁾、かれのばあい、神学や目的論はたんなる「表現」の問題ではけっしてなく、こういう思想的方法論的特徴をとりさってしまえば、Süßmilch はもはや Süßmilch ではなくなってしまうであろう。そして、かれをいちじるしく特徴づけているこの神学的目的論思想や方法から判断すれば、統計学史上かれよりもはるかにたちおくらせていたとされているその同時代者 G. Achenwall (1719-72) の国状論=統計学は、必ずしもたちおくらせているとは断定し

24) G. Bondi, a. a. O., S. 27.

25) はじめはピエティストで、その後ドイツにおける無神論の先駆者の1人になった J. Ch. Edelmann (1698-1767) に対して、Süßmilch は 1747 年に痛烈にかれを非難する論文を書いた。J. Ch. Förster, a. a. O., S. 35-37. もっとも、Süßmilch におけるピエティスムの内容がハレに学んだのちどのように推移していったかということについては、現在のところ筆者は的確に述べることができない。

26) このよこのような位置づけは 19 世紀後半以降いまだにおこなわれている。Vgl. I. Esenwein-Rothe, "Johann Peter Süßmilch als Statistiker." *Die Statistik in der Wirtschaftsforschung*. Berlin, 1967.

27) 森戸辰男「戦時人口論著としてのズエースミヒの『神の秩序』」(『人口問題』第6巻第1号1943年8月号)51ページ。

28) Achenwall に関する私見については、拙著『ウィリアム・ベティ[増補版]』の補論 I を参照されたい。

えないであろう²⁸⁾。

Süßmilch におけるこの方法論的特徴と、自然科学的知識およびそれにもとづく経験的実証主義的方法との関連を明らかにすることは容易ではない。けれども、Graunt や Petty が主としてイギリス経験論の新哲学にみちびかれながら、自然科学的(数量的)方法を社会経済現象の研究に適用して政治算術を創始したことと考えるならば、Süßmilch のばあいには、神学的目的論的思想や方法がかれの自然科学的実証主義的方法を社会現象の研究に積極的に適用させる導きの糸になっていたように考えられる。そしてこの点は、かれの直接の後継者で、『神の秩序』を祖述したデンマークの法学者 L. A. G. Schrader (1751-1816) が Süßmilch の「神の秩序」を「基本的自然法」(Grundgesetze der Natur) と言いかえ、両者を同一視しているように思われることを考えると²⁹⁾、いっそうたしからしくなるのである。

それにしても、Graunt-Petty の政治算術は資本主義社会の全体認識の理論を素朴ながらももっていた、というよりも、むしろ社会経済現象の研究に自然科学的数量方法を適用する過程にこの理論を創造した。つまり、Graunt における「真の政治学」(すなわち社会科学)の建設の提案や、それをうけた Petty における政治算術の基本理論としての労働価値説の創始がそれである。ところが、Süßmilch は、約 1 世紀後においてもこの理論を理解することさえできなかった³⁰⁾。この事実、いうまでもなく Süßmilch がこうむらざるをえなかった歴史的制約の結果である。その反面、すでに述べたかぎりにおいても明らかであるように、Süßmilch の『神の秩序』は人口動態の社会性についてのきわめて多面的な解明において、ひじょうに豊富で示唆的な問題を提起している。『神の秩序』の再評価は、かりに問題を統計学史に限定しても、すくなくともこれらの問題の綿密な総合的検討の過程をつうじてなされなければならない。そしてこの検討は、18 世紀中葉のプロイセン的「啓蒙」の特質をより明確にするという問題にも寄与するであろう。

29) L. A. G. Schrader, *Grundgesetze der Natur in der Geburt, dem Leben und Tode der Menschen, als ein freyer Auszug, aus Süßmilchs göttlicher Ordnung, in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts u. s. w. in veränderter Ordnung entworfen*. Glückstadt, 1777. Einleitung.

30) Ebenda, S. 259-262. ここでは、Süßmilch によるイギリス政治算術の理解が、「政治算術の概念および歴史」という題目のもとに要領よくまとめられている。